

批評と紹介 阿蘇山道を走る

久野重一郎

九州、沖縄、山口の九縣道路講習會が、熊本市公會堂で開かれた。最終日の二月四日、一班は八代の日本セメント工場へ他の一班は國立公園大阿蘇山へ登る。後班の一同は、九時十五分熊本驛を發し、豊肥線で坊中へ向つた。「道路」の講義をしてゐる私は、鐵道よりも路を見たいと思つた。榊井課長さんから車の御配慮を賜つたのは、眞にありがた

い次第であつた。

○

を右に見てから、車は大津街道の杉並木を走つた。昨夜、小雨があつたのであらう、よく手入されたマカダムは、僅かに濕りをもつて、濛塵を見ない。外は殆ど無風、朝の日はさはやかに輝いてゐる。寒いといふほどの氣温でもないのである。

『冬に珍らしい登山日和です』運轉手君の話である。

『僕等を、阿蘇が迎へてゐるんだらう』

そんな無駄口をきいてゐる間に、車は、右に白川を見下しながら、緩やかな勾配を上つてゐる。路といひ、畑とい

綿屋を出たのは九時であつた。同行二人。宮本武藏の墓

ひ、土の色の黒いのが目につく。火山灰のせいであらう。

『あの邊が立野火口瀬です』

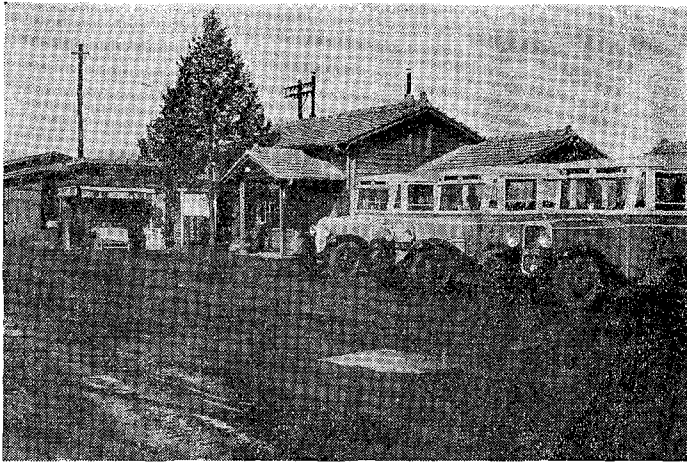
なるほど、外輪山のつらなりが、

白川によつて深く切り下げられてゐる。左右の山の切目から、阿蘇火口丘が、悠然として、僕等の行手を壓してゐる。ところ／＼に、繪になりさうな杉林があつて、また別の趣を添へる。

年頃の娘さんが、大きな牛を引いて來るのに會つた。すると、車は停車して、その行過ぎるのを待つた。阿蘇風景の一つであらう。

路は、やがて、白川の支流の黒川にそふて、ぐつと左方へ曲がる。對

岸に京大の火山研究所が見えた。黒川を渡つてからは、し



冬の阿蘇中驛の寒風を戸を閉めてみる

ばらく、單調な路がつゞいた。足の先が冷たくなつた、と

思つてゐるうちに、車は、まもなく、坊中驛の前へとまつた。時に十時二十分。

汽車よりも車で早し

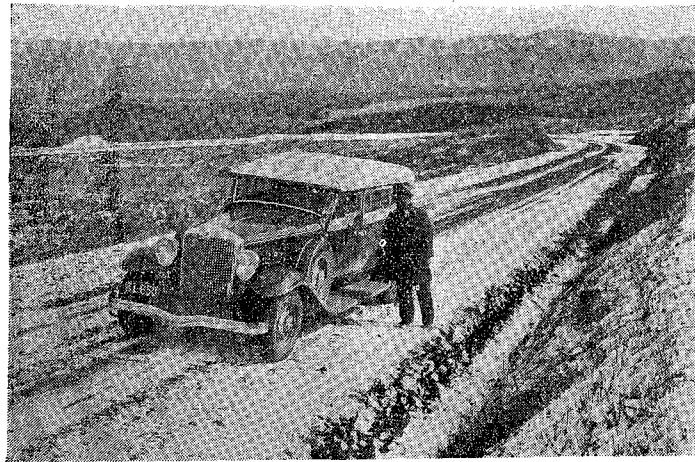
冬の阿蘇

そんなことを考へながら、汽車で來る會員の到着を待つた。太陽は、依然照つてゐる。しかし、標高六百米に近い上に、強い西風があつたので、手袋をとると、手が切れさうに痛い。ここで六枚寫眞をとつたが、歸つて現像して見ると、二重露出の失敗を二回までやつてゐた。耳と手の冷たいのに、氣をとられたためらしい。

坊中驛から南方を見上げると、すぐ目の前に、高い山が

追つてゐる。正面のやゝ左方に、鋸の齒の如く屹立する奇峰は、根子岳、高岳であらうか。その右方、なだらかな圓味を見せてゐるのは、往生岳、杵島岳のうちであらう。

目を北方に轉すると、豊肥線の方に、幅四軒位の阿蘇谷が、ゆるやかに展開して居る、その盡きるところ、森の彼方、そこに外輪山の城壁が立つ。西から東へ、一望十軒餘。それが、ミリングマシーンで切り揃へたやうに、頭が平らである。自然のなした工事は、スケールが大きい。



登山道の大曲線。阿蘇谷を隔てて外輪山を眺む

十時五十分、汽車が着いた。會員は、二十人乗の登山バスを數臺連ねて、中岳の現噴火口へ

は、深い敬意を、表しないわけには行かない。

私は一足先きに、ドライヴウエーにさしかゝつた。熊本縣土木課の異常な努力に成つた路である。幅は、少くも七米はあるだらう。初めの一軒餘は、林の中が多かつた。その後は、木一本生えてゐない山腹を、うねりうねつて上つてゐる。路は、雪解けであつたが、排水の設計並に土質のよいためであらうか、ぬかるみにならない様であつた。また、維持も良いのであらう、路面に、水溜りはひとつもなかつた。特異の凸凹が限りなく並ぶこの山崩に、かやうな緩勾配の自動車道造つて、しかもこれを完全に保守されてゐる縣當局に對して

○ 播鉢を倒さしたやうな可愛らしい米塚と、同じ高さ位

まで昇ると、雪が解けずにあつた。轍だけは、黒い火山灰の地色を、くつきりと示してゐた。一週間前までは、スキに賑つたさうである。ここで車をとめて、カートの模様などカメラに収め、遠く阿蘇谷を見下したりしてゐる間に登山バスは、續々と上つて行つた。

路は、さらに、杵島岳の西側中腹を上り、やがて南側に轉じ、僅かに下る。すると、思ひがけぬ平原が、眼前に展開した。南方に聳える鳥帽岳との間、二十萬坪位はあらうか。草千里が濱といふさうであるが、今日は、積雪二十糎一面の雪原である。ここで會員の記念撮影をした。

更に走ること若干で、自動車道の終點、古坊中に、到着した。時正に正午。起點坊中驛から十五糎である。この頃、暗雲、俄然たれこめて、寒さ一入身にしみた。

○ 阿蘇山上神社の手前、阿蘇山本堂の前から右折し、雪を

踏んで上ること一糎。やがて、中岳の頂上の現噴火口へ着いた。西側を半周する。

幾つものに仕切られてゐる火口、底知れない絶壁、濛々として昇る白煙。これだけでも、身の引きしまるのを覺えるに、十分である。その上、帽子を吹きとばすやうな西風と一緒に、猛烈な吹雪が、頬を打つのである。氣温は、零下五度、ぞくぞくする。腹もへる。

さういふわけで、山上の數十分は、眞にいたましい思をした。しかし、よい思ひ出草とはなるであらう。別な路を通つて、古坊中に歸つたのが、午後一時。温かい晝食に、やつと生氣を回復した。

○ 小憩して、一路、熊本へ走つた。

阿蘇外輪山

東西 一六糎。南北 二三糎。周圍 一三〇糎。

阿蘇火口丘の五岳

高岳 一五九二米

根子岳 一四〇八米

鳥帽子岳 一三三七米

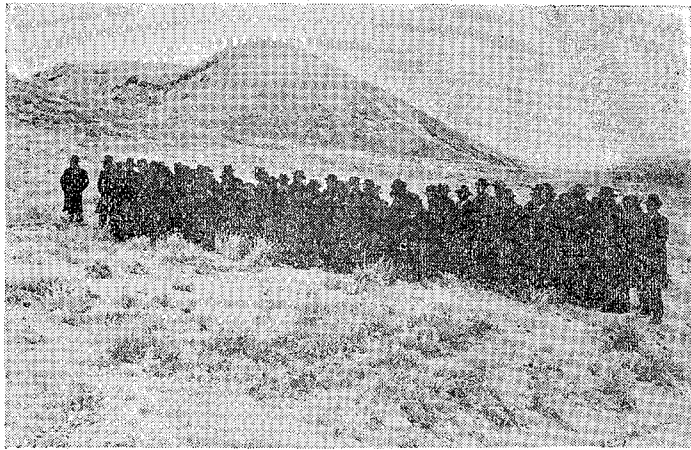
中岳(活動中) 一三二三米

杵島岳 一三二二米

阿蘇山中にある舊火口の數は、約六十、との話であつた。

○
阿蘇山道——熊本から阿蘇山頂に至る自動車道は、前にも記したやうに、設計及維持が、誠によく行はれてゐて、ひそかに敬意を禁じ得ないものがあつた。

望蜀といふわけでもないが、その曲線部の二三に對し、ほんのもう一寸、手を加へることが出来たら、更に一層、申分ないものに、なるだらうと感じた。眞に失禮な申條ではあるが、御参考の一端ま



でに、思ふまゝを記してみたいと考へる。

登山者の紀念撮影

○
ドライブブウエーを登るときは、さまで氣がつかかなかつたが、下りは、高速であつたためか、曲線部が大邊氣になつた。第一に、安全視距を、もうすこし欲しい、と思ふところが、二三あつたやうに記憶する。すなはち、カーブの先端まで、小山が突きでてゐて、一向、見透しのきかないやうな所があつて、車は、その度毎に、警笛を鳴らしながら緩行して居つた。乗つてゐて、不安に堪へなかつた。あるカーブ附近では、そのすぐ手前の築堤用の土をとつたのであらうか、路傍を深く掘り下げてあつた。走りながら、ちらと見

ただけで、よくわからなかつたが、もし私の想像のやうであつたなら、寧ろ、すぐそばにあるカーブの先端の小山を段切にして、その土で、バンキングした方が、一石二鳥の効果があつて、よかつたと思ふ。

阿蘇も、いまや、晴れやかな國際舞臺に上つたことではあるし、もし將來、機會に恵まれたならば、まづ曲線部の段切を實行して、疾走者の不安を除き、自動車事故の防止に努めて戴いたら、誠にありがたい。「道路構造に關する細則」によると、國道に於ける安全視距の標準は、百米である。わが大阿蘇山にも、その位の安全視距は、あつて良いではないかと思はれるのである。

水郷大橋の起工

千葉縣土木課

千葉縣香取郡佐原町と茨城縣稻敷郡本新島村の間利根川に架設せらるゝ水郷大橋の起工式が去る二月二十日千葉、

茨城兩縣知事の主催に依り内務大臣代理武井内務省土木局道路課長、眞田内務省東京土木出張所長及關係各内務技師、